

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

理論モデル「存在 神 論」のスピノザ哲学への適用

著者	大野 岳史
著者別名	Takeshi Ohno
雑誌名	国際哲学研究
号	1
ページ	109-117
発行年	2012-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00005259/



理論モデル「存在 - 神 - 論」のスピノザ哲学への適用

大野 岳史

はじめに

ハイデガーは『同一性と差異』所収の「形而上学の存在 - 神 - 論的構成 (Die Onto-Theo-Logische Verfassung des Metaphysik)」¹において、形而上学を存在 - 神 - 論として捉え直した。現代ではこのハイデガーの立論をうけ、存在 - 神 - 論的構成が形而上学に適用できるのかを検証するいくつかの試みが見られる。この試みによって形而上学は一つの構成のもと、それぞれの形而上学を区別するための徴表を探究することもできるだろうが、同時に「存在 - 神 - 論」というレッテルをあらゆる形而上学に貼る試みでもある。理論モデルを形而上学に適用する方法の有用性だけに注視してその限界を知らないままであれば、哲学史を読み解く際の躓きの石となりかねない。本稿ではスピノザによって打ち立てられた汎神論と呼ばれる特異な形而上学に、理論モデル「存在 - 神 - 論」を適用できるのかを検証する。それによって理論モデルを用いて形而上学を辿り直し解明するという方法がどのような意味を持ちうるのかを明らかにしよう。

スピノザの形而上学に理論モデル「存在 - 神 - 論」を適用するためには、そもそもこの理論モデルがどのようなものであるかを確認しなければならない。ハイデガー以前にもカントが「存在論的神学 (Ontotheologie)」という言葉を用いている²。まずはカントにおける「存在論的神学」が何を意味するのかを確認し、その上でハイデガーの提唱する「存在 - 神 - 論的構成」を概観する。そして形而上学にこの理論モデルを適用する一例として、ジャン・リュック・マリオン (1946 -) によるデカルトの形而上学についての研究を挙げる。デカルトはスピノザと同じく 17 世紀の合理主義哲学を構築した哲学者であり、デカルトを参照することはスピノザの形而上学への適用を検証するために有用であろう。

1 カントにおける存在論的神学

カントがデカルトによる神の实在のアプリオリな証明を「存在論的証明 (ontologische Beweis)」と呼んだことは周知のことである。とりわけ『純粹理性批判』³においてカントは神の存在証明を批判し⁴、その後で理性に基づく神学に対する批判へと進む。そこでカントは神学の分類を行っており、その分類の一つとして「存在論的神学」がある。

カントは神学を「根源的存在者についての認識」と規定し、その上で神学を「合理的神学 (theologia rationalis)」と「啓示神学 (theologia reverata)」に分ける。それぞれ理性に基づく神学と啓示に基づく神学である。カントは理性に対する批判を行っており、そのため主に合理的神学に議論は絞られる。合理的神学は超越論的神学と自然神学に分けられ、超越論的神学は宇宙論的神学と存在論的神学に、自然神学は物理的神学と道徳的神学に分けられる⁵。

存在論的神学は二種類に分けられる超越論的神学のうちの一つである。超越論的神学とは、純然たる超越論的概念、すなわち「根源的な、もっとも実象的な存在者 (ens originarium, realissimum)」や「存在者の存在者 (ens entium)」などの概念を通して根源的存在者について思考する学である。超越論的神学において理性による根源的存在者が存在することの認識は認められるが、同時に根源的存在者を表す概念は超越論的でなければならない。この超越論的神学が宇宙論的神学と存在論的神学に分けられるのだが、宇宙論的神学と存在論的神学の違いは、根源

的存在者の実在の導出に「不定の経験 (unbestimmte Erfahrung)」を用いるかどうかに存する。このことは神の実在についての宇宙論的証明と存在論的証明の違いに対応する。すなわち神の存在について宇宙論的証明を採用するのが宇宙論的神学であり、存在論的証明を採用するのが存在論的神学である。宇宙論的証明は「不定の経験だけを、言い換えれば、何か或る存在だけを経験的に根底に置く」証明であり、存在論的証明は「すべての経験を捨象し、単なる概念からまったくアприオリにある最高の原因の存在を推論する」(A590/B618)。すなわち存在論的神学は経験によらず概念のみによって神の実在を導出する学である。

カントは細かく神学を分類するが、それぞれが不可侵であるわけではない。むしろカントによれば「超越論的神学のみを許す人は理神論者 (Deist) と名づけられ、自然神学をも認める人は有神論者 (Theist) と名づけられる」(A631/B659)。合理的神学は超越論的神学と自然神学に分けられるのだが、それらがまったく相容れないものと考えるのは間違いである。カントの目論見は思弁的理性による神学を批判することにある。神学の諸区別はそれぞれの神学における様々な思弁的理性の働きを説明する助けとなる。存在論的神学も神学における理性の働きの一様態を示すための一つのケースである。そして「存在論的神学」というケースによって経験に頼ることなく超越論的概念のみを用いて推論する理性の働きが明らかになるのである。

2 ハイデガーにおける存在 - 神 - 論としての形而上学

2-1 存在 - 論と神 - 論

カントは神学の一類として存在神学を挙げているが、ハイデガーは形而上学の有様として「存在 - 神 - 論」という言葉を用いる。ハイデガーにとっての形而上学とは、存在論であり神学である。すなわち「西洋の形而上学はギリシア人におけるその起源以降、形而上学という名称にも拘らず特に存在論であり神学である」⁶。さらに形而上学が神学である由縁を、「神が哲学のうちにはいつてくるため」⁷とする。哲学者がどの観点に立つかにかかわらず、哲学者は自身の思考が未だ到達していないある統一の自己開示を経験する。この経験が形而上学の本質でもあり、この統一は存在するものの統一であり、「神」と名づけられるものに他ならない。ここで存在 - 神 - 論が成立することの条件として、「哲学に神が入ってくる」があることに注目しなければならない。哲学に神がいかにして入ってくるのかという問いは、存在 - 神 - 論がどのようにして成立するのかという問いと同一である。

この問いに答える土台を作るため、「- 論 (-logia)」について語らなければならない。ハイデガーは「- 論」を推論の正しさのみでなく、学のあらゆる知識・思考の組織的運動の确实性を提供するものと考え⁸。したがって「- 論」と称されるものは根拠ないし理由を始点とし、その学の総体 (Allheit) に根拠を求めまた与える思考に他ならない。形而上学は存在者そのものを、すなわち全体としての存在者を思考する。この思考は存在者の総体に対して最高位の根拠を与える統一 (Einheit) へと向かう。したがって形而上学は存在者について思考する点では存在論であり、その根拠となる最高位の統一としての神を前提とする点で神学であり、総じて存在 - 神 - 論である。存在 - 神 - 論としての形而上学のロゴスは存在の総体が存在することの根拠となる統一としての神を思考することに存する。

「存在 - 神 - 論」がどのような意味で「- 論」であるかは明らかになった。それでは神はいかにして哲学のうちに入るのか。ハイデガーはヘーゲルにおける「思考の事態」を「絶対的思考において、そしてそれとして、存在者の思考されていることに関して存在」⁹とする。言い換えれば思考の事態は根拠としての存在である。根拠としての存在が根本的に思考されるのは「第一根拠 (erste Grund)」、「原 - 事態 (Ur-Sache)」、「第一原因 (causa prima)」、「究極の理拠 (ultima ratio)」として表象された場合である¹⁰。すなわち思考の根源的事態とは根源へと遡り存在者全体に根拠を与えることに他ならない。この根源が神であり、根源としての神は形而上学的概念として「自己原因 (causa sui)」という名称が獲得する。ここで形而上学がその思考を神にまで進めなければならないことが帰結されたのである¹¹。

ハイデガーは存在 - 神 - 論としての形而上学を次のように規定する。「形而上学が存在者を各存在者そのものに共通の根拠に注目して思考するならば、形而上学は存在 - 論としての論理学である。形而上学が全体としての存在者そのものを万物に根拠を与える最高の存在者に注目して思考するならば、形而上学は神 - 論としての論理学

である」¹²。ここでハイデガーが言う「論理学」とは根拠を求めまた与える思考の運動に他ならない。そしてこの規定がこれまでの立論を集約していることは明らかである。

2-2 存在そのものと存在者の差異

形而上学が存在 - 論であり神 - 論であることが明らかになったが、これら二つの論理学の形而上学において統一されることは何を意味するのか。存在 - 論は存在者を、そして神 - 論は存在者の存在を支える存在そのものである神を対象とする。したがって存在者と存在そのものとの間に差異があるはずだが、この差異そのものは哲学史において忘却されてしまっているとハイデガーは指摘する。それでは形而上学は何を探究しているのか。ハイデガーによれば、形而上学は差異としての差異ではなく、差異における「差異あるもの (Differente)」に注視している¹³。ここで「差異あるもの」とは、普遍的なものにおける存在者としての存在、最高の存在者の存在、すなわち神を意味する。差異としての差異、すなわち差異そのものは形而上学では注視されず、いわば形而上学の領域を超えている。それではどのようにして差異そのものへの気付きはどのようにして可能になるのだろうか。

ハイデガーは差異そのものを注視するための方法として、形而上学が陥っている「差異の忘却 (Vergessenheit der Differenz)」からの退歩を挙げる。もちろんこの退歩は形而上学的思考によって可能になるのではない。退歩は現象学的分析である。本稿では差異の忘却から退歩する現象学的分析については詳述せず、結果のみを記そう。すなわちハイデガーが現象学的分析によって見いだした形而上学の存在 - 神 - 論としての本質を明らかにしよう。

存在そのものと存在者の関係は、根拠づけるものと根拠づけられたものの関係である。すなわち「根拠としての存在 (Sein als Grund)」は存在者を根拠づける。そして「最高の存在者 (das Seiendeste)」は自らが存在者であることを根拠づけるだけでなく、さらに存在そのものをも根拠づける。こうして存在そのものと存在者は分離し、あるいは融合する。分離と融合という運動がある以上、存在そのものと存在者には「間 (Zwischen)」がなければならない。この「間」があることは存在そのものと存在者の間に差異そのものがあることを示している。

形而上学は存在と存在者の差異に注視せず、存在そのものではなく根拠としての存在者を探究する。この根拠としての存在者は最も根源的な根拠づけ、すなわち自らの原因となることを要求する。この要求は「自己原因 (causa sui)」としてのみ満たされる。したがって哲学における神の正当なる名称は「自己原因」他ならない。以上のように、ハイデガーは自己原因として神が哲学のうちに入り込む事態を形而上学の存在 - 神 - 論としての本質と見なす¹⁴。

3 マリオンによるデカルト形而上学への存在 - 神 - 論の適用

3-1 マリオンにおける思惟の存在 - 神 - 論と原因の存在 - 神 - 論

神学の一類としての「*Ontotheologie*」を用いるカントと異なり、ハイデガーは形而上学の存在論と神学との統一として「*Onto-Theo-Logik*」を用いる。この言葉を用いてカントは理性による神学を、そしてハイデガーは形而上学を批判する点で類似している。しかしカントは存在論的神学を理性の誤りとするが、ハイデガーは存在 - 神 - 論としての形而上学が扱える領域を限定するにとどまり、形而上学を排撃することまではしない。マリオンは後者の立場を取り、デカルト形而上学に理論モデル「存在 - 神 - 論」を適用する。

マリオンはドミニク・ジャンコーに言う「フランス現象学の神学的転回」の中心に位置する。マリオンの現象学研究と神学的思索は意義深いものであり、また同時に多くの哲学史研究も残している。マリオンはデカルト研究者として著名であり、『デカルトの灰色の存在論について (*Sur l'ontologie grise de Descartes*)』(Vrin, 1975)、『デカルトの白紙の神学について (*Sur la théologie blanche de Descartes*)』(PUF, 1981)、『デカルトの形而上学のプリズム (*Sur le prisme métaphysique de Descartes*)』(PUF, 1986)を哲学史研究の中核としていた。

マリオンは『デカルトの形而上学のプリズム』(以下『プリズム』と略)第二章において「存在 - 神 - 論的構成」を理論モデルとして選択し、この理論モデルをデカルトの存在論に適用することでその特殊性を見出していく。具体的にはデカルトの存在論において二つの存在 - 神 - 論、すなわち「思惟の存在 - 神 - 論」と「原因の

存在 - 神 - 論」を見出し、この二つの存在 - 神 - 論の「二重化 (redoublement)」によってデカルト形而上学が特徴付けられているということが、第二章におけるマリオンの帰結である。まずは「思惟の存在 - 神 - 論」と「原因の存在 - 神 - 論」を概観しよう。

「思惟の存在 - 神 - 論」は、存在者の存在様式について語る「存在 - 論」と、「我 ego」という卓越した存在者の特権的な実在について語る「神 - 論」とが相互に根拠づける関係によって説明される。マリオンによれば、デカルトにおいて「存在者を純粋な存在者という地位に送り返す存在様式」とは、「対象 (objectum) という様式において存在するという存在様式」である¹⁵。この対象は知性にとっての対象であり、対象が存在者となるのは「思惟されたもの (cogitatum)」である限りにおいてである。そしてあらゆる「思惟されたもの」に対して「思惟するもの (cogitans)」は先立っていなければならない。このような思惟するものとその対象との関係は、思惟するものが卓越した存在者であり、さらにその他の存在者より確実に実在することの根拠となる。このような卓越した存在者は「我 (ego)」と呼ばれる。しかし「思惟するもの」は同時に「思惟されるもの」である。なぜなら思惟するものは自らの思惟を自身にまで及ぼし、自らを一つの存在者として対象化するからである。思惟は「より本源的には (plus originellement)」「自己思惟 (cogitatio sui)」である。そして「我」という卓越した存在者がその他の存在者に先立つと同時にその存在を根拠づけるのであり、対して思惟するものと思惟されるものとの関係によって語られる存在様式は思惟するものの思惟する限りでの卓越的な実在を根拠づける。こうした二つの根拠づけによって思惟の存在 - 神 - 論は構成される。ここで存在 - 論は存在者を「思惟されたもの」である限りで存在者と見做し、神 - 論は「思惟するもの」という卓越した存在者としての「我」を見出す。

ここで「卓越した存在者が神ではない」という問題が残される。言い換えれば「神 - 論」が神についての論理学とならないのである。「自己思惟」という表現は神を語りつくすにはあまりにも不十分である。こうして思惟の存在 - 神 - 論においては神と卓越した存在者の間に歪みが生じてしまう。また「思惟された」と限定された存在者は存在する可能性があるだけのものであり、言い換えれば「理論的存在者 (ens rationis)」¹⁶にとどまる。むしろ存在者が存在者として現れるのは「原因 (cause)」によってであり、全ての実在 (toute existence)¹⁷を原因が引き受けるとマリオンは考える。このような存在者と原因との関係についてマリオンは一切の例外を認めない。したがってあらゆる存在者は原因を免れることはできず、このことは神にまで及ぶ。実在するのなら原因に従属しなければならない、神もその例外とならないのである。したがってすべての実在するものは「原因されたもの (causatum)」であり、このような状況をマリオンは「形相的一義性 (univocité formelle)」¹⁸と表現する。このようにして存在者の実在はすべて因果性によって根拠づけられることが、すなわち存在 - 論の原理とは因果性であることが明らかにされる。

思惟の存在 - 神 - 論では卓越した存在者として「思惟されたものとしての存在者の思惟的根拠 (fondement cogitativ de l'ens ut cogitatum)」である「我」が採用される。このことが卓越した存在者が神ではないという歪みを生じさせる。そこで原因の存在 - 神 - 論では別の卓越した存在者として「原因されたものとしての存在者の原因という根拠 (fondement causal de l'ens ut causatum)」が採用される¹⁹。「我」が自己思惟しなければならないことと同様に、原因の存在 - 神 - 論における卓越した存在者は自己原因でなければならない。言い換えれば原因の存在 - 神 - 論において卓越した存在者は自らによって根拠づけられることで実在する。当然、自己原因と名付けられるものは神に他ならない。これが原因の存在 - 神 - 論における神 - 論である。さらに自己原因である神は他のあらゆる存在者の原因となり、神が原因された存在者を根拠づけることによって原因の存在 - 神 - 論における存在 - 論が成立する。このように原因の存在 - 神 - 論は自己原因としての神を中心として構成される。その意味で原因の存在 - 神 - 論の構成はハイデガーにおける「形而上学の存在 - 神 - 論的構成」に他ならない。

マリオンにとって自己原因とは機能 (fonction) である²⁰。「我」は自己原因という機能を担うのに不十分であり、神がこの機能を担う。このことは神よりも自己原因という機能が先立っていることを意味する。また自己原因も作用因という原因性に準拠していることを踏まえれば、神もまたその他の実在するものと同様に原因されたものとして考えることが可能である²¹。以上のようにマリオンにおける原因の存在 - 神 - 論では自己原因と原因性そのものが神に先立つという事態になる。神は卓越した存在者であるのだが、むしろ自己原因という機能が神を卓

越した存在者に仕立て上げているのである。

3-2 二重化された存在 - 神 - 論

以上のように思惟の存在 - 神 - 論と原因の存在 - 神 - 論の構造が明らかにされた。次にこれら二つの相互関係が如何なるものであるかが問題となる。マリオンは二つの存在 - 神 - 論の関係について、「デカルトは「存在とは思惟することである」という存在の第一の意味を「存在とは原因することである」という第二の意味によって再解釈することで存在 - 神 - 論を二重化する (Descartes redouble d'onto-théo-logie en réinterprétant la première acception d'*esse*, *esse*: *cogitare*, par une seconde, *esse*: *causare*)」²²と述べる。マリオンによれば二つの存在 - 神 - 論は並置 (juxtaposition)、不統一あるいは対立による二分割という関係にはない。また二重化といっても、前述のように原因の存在 - 神 - 論はその卓越した存在者についての思惟において思惟の存在 - 神 - 論では覆い尽くせない場面をも射程に入れるため、二つの存在 - 神 - 論が完全に重なるわけではない。

デカルトは「我」を「第一の原理 (premier principe)」とするのだが、マリオンはこの原理が神自身の実在を自らに従属させるとし、「我」の卓越性を強化する。しかし第一原理としての「我」は自らを創造された不完全で他のものに依拠する存在者であると認識し、自身が「最高の存在者 (summum ens)」に値しないことに気付く²³。こうして神の実在をも従属せしめる「我」が「最高の存在者」である資格を得ることができないという事態が生じる。先に挙げたように、思惟の存在 - 神 - 論における卓越した存在者が神ではないのである。マリオンはこのような事態が矛盾をもたらすとは考えないが、これまでの論述では原因の存在 - 神 - 論が思惟の存在 - 神 - 論より根源的な役割を担っているように思われる。確かに原因としての神は自己思惟をも根拠づける存在者である。しかし思惟は原因が産出していないものに対しても向けられる。言い換えれば、「我」は自らが根拠づけるかどうかにかかわらず対象化することができる。したがって思惟の存在 - 神 - 論と原因の存在 - 神 - 論の関係を、一方が他方に帰着される関係として考えることはできない。問題とされるべきは二つの存在 - 神 - 論の「隔たり (écart)」である。マリオンによれば、デカルトは二つの存在 - 神 - 論を安易に同一視せず、むしろ二つの存在 - 神 - 論を区別した²⁴。つまり思惟するものと思惟されるもの (対象化されるもの) の関係と、原因となるものと原因されるものの関係は、ともに根拠づけるものと根拠づけられるものの関係でありながら、同じものについての別々の側面を表現しているわけでもなければ、一方が他方に帰属するでもない。以上がマリオンによるデカルト形而上学への理論モデル「存在 - 神 - 論」の適用である²⁵。

このように思惟の存在 - 神 - 論と原因の存在 - 神 - 論が適用される領域は異なる。マリオンの立論は思惟の存在 - 神 - 論の考察から始まり因果性と思惟の存在 - 神 - 論における神の不在という問題に行き当たり、そこから原因の存在 - 神 - 論へと移行するという過程を経ている。「我」は第一の原理として見做されており、デカルトの形而上学において思惟が重要な位置を占めるのは確かだが、原因にも重要な位置を与えられている。最高の存在者である神も原因には従わなければならない、神は自己原因という特権的な機能を担う。機能としての自己原因が先行し、自己原因によって卓越した存在者としての神が可能となる。このように理論モデルとしての存在 - 神 - 論のデカルト形而上学への適用はデカルト形而上学の合理論としての側面を浮き彫りにする。ここで合理論としての側面とは、卓越した存在者とそれ他の存在者との根拠づけの関係、存在 - 論と神 - 論との相互の根拠づけの關係に他ならない。こうした関係性が先立ち、そこに何が当てはまらうのかが記述されることとなる。存在 - 神 - 論的構成を適用するため、根拠づけるものと根拠づけられるものとの関係性が前提されているのである。しかしこうしたデカルト形而上学の解釈はいくつかの問題を残すだろう。例えば思惟の存在 - 神 - 論において「我」が対象を思惟し自己をも思惟することと、原因の存在 - 神 - 論において「自己原因」があらゆるものの原因となり自己自身の原因となること、このことは並行して考えていいのだろうか。デカルトは「我」が対象を思惟することと自己自身を思惟することについて、同じ「思惟する」という言葉で同じことを意味しているのか、あるいは別のことを意味しているのかが明らかではない。これに対して「第四答弁」によればデカルトの自己原因は作用因ではなく形相因とみなされなければならない、したがって神が自己原因であることと神があらゆるものの原因となることとは、そのうちにある因果性が明らかに異なる。そもそも思惟の存在 - 神 - 論と原因の存在 - 神 -

論が対象性と因果性の側面での違いのみでなく、そもそも構成が異なる学である可能性が見いだされる。また思惟の存在 - 神 - 論と原因の存在 - 神 - 論に区別することは形而上学を対象性の側面と因果性の側面とに区別することに他ならないが、そもそもこの区別自体の妥当性が確認されなければならない²⁶。

4 スピノザの形而上学への存在 - 神 - 論の適用

4-1 スピノザの形而上学における内在性と存在 - 神 - 論

デカルトと同様に合理論者と呼ばれるスピノザにおいて、どのような「存在 - 神 - 論」を見出すことができるだろうか。マリオンはデカルト以降の形而上学は思惟の存在 - 神 - 論を継承するか、原因の存在 - 神 - 論を継承するかに別れると考える。すなわちマルブランシュ、ロック、バークリが思惟の存在 - 神 - 論を、ライプニッツやスピノザが原因の存在 - 神 - 論を継承する²⁷。スピノザにおいて「我」という特権的な存在者に言及されることはなく、それゆえ『エチカ』²⁸において思惟の存在 - 神 - 論はスピノザ哲学に見いだされない²⁹。スピノザの形而上学に存在 - 神 - 論的構成を見いだすのであれば、それは原因の存在 - 神 - 論であろう。

それではスピノザの形而上学に原因の存在 - 神 - 論を適用することができるのか、『エチカ』を辿ることで確認しよう。スピノザの存在 - 神 - 論を読み解くためには、『エチカ』第一部にあるいくつかの公理と定理を見ておかなければならない。まず「すべてのものは自己のうちに在るか他のもののうちに在るかである」(E1Ax1)。そしてこの公理を用いて「すべて在るものは神のうちに在り、そして神なしには何ものも在りえずまた考えられない」(E1P15)ことが証明される。この定理により、神という卓越した存在者によって根拠づけられた神以外の存在者が、「他のもののうちに在る」すなわち「神のうちに在る」ことは明らかである。こうしたものは「実体の変状 (affectio)、すなわち他のもののうちに在りかつ他のものによって考えられるもの」である状態に他ならない (E1Def5)。これに対して「自己のうちに在る」ものは卓越した存在者であり、卓越した存在者とは唯一の実体である神に他ならない (E1P14)。なぜなら実体とは「それ自身のうちに在りかつそれ自身によって考えられるもの」(E1Def3)だからである。スピノザにおいて根拠づけられることは「うちに在る」ことを、言い換えれば内在することを意味する。あらゆる存在者は神のうちに在ることで神によってその実在が根拠づけられ、また神は自己のうちに在ることで自らの実在を根拠づける。根拠づけることは原因となることでもある。したがってスピノザの形而上学において実在することの因果関係は神のうちにあらゆるものが内在するという内在性に存する。つまりスピノザの形而上学に見いだされる存在 - 神 - 論は内在性に集約される。

4-2 スピノザの形而上学における内在的・形相的因果性

上記の検証より、いっそう「原因」概念に注視するのであれば次の公理を見ておかなければならない。すなわち「与えられた一定の原因から必然的に結果が帰結する。そして逆に、何も原因が与えられなければ、結果が帰結されることは不可能である」(E1Ax3)。このことはあらゆる事象が因果性に従っていることを意味する。またこのことは実体についてもあてはまる。なぜなら第一部定理7において、実体は他のものから産出されえないために自己原因であると帰結するからであり、唯一の実体である神も因果性に従うことは明らかである。そしてこのことはものの実在と作用についても適用される。つまりいかなるものの実在し作用するためには原因がなければならない。したがってマリオンのいう「形相的一義性」³⁰がスピノザ哲学においても成立するのである。

「自己原因」は哲学における神の正当な名称であるとハイデガーは評価するのだが、スピノザにおいても神は自己原因である。自己原因は「その本質が実在を含むもの、あるいはその本性が実在するとししか考えられないもの」(E1Def1)である。この自己原因の定義と「実在しないと考えるものは何であれ、その本質に実在は含まれない」(E1Ax7)ことを併せて考えれば、本質に実在を含まれないものとは自己原因以外の存在者に他ならない。この存在者の区別は実在するとししか考えられない存在者と実在するともしないとも考えられる存在者、言い換えれば必然的実在を有する存在者と可能的実在を有する存在者の区別である。

以上のようにスピノザの形而上学に原因の存在 - 神 - 論的構成を見ることは可能である。マリオンはライプニッツの充足理由律を通して原因の存在 - 神 - 論的構成に形相的一義性を見出しており、デカルトの直接的な著

述を根拠としてないのだが、スピノザは前述の『エチカ』第一部公理3と定理11第二の証明であらゆる事象に原因があることを認めている。したがってスピノザにおいてはデカルトよりも形相的一義性が明確に示されている³¹。また形而上学の存在 - 神 - 論的構成は神が自己の原因であるときの神の实在と、神がその他の事物の原因であるときの事物の实在は別のものを意味する。すなわち神の实在は必然的实在であり、その他の事物の实在は可能的实在である。この差異は因果性の差異にもつながる。すなわち神の实在はその本性から必然的に帰結し、それゆえに神の本質と实在の関係には形相的因果性が潜んでいるのだが、その他の事物は神の本生から必然的に生じる(E1P16)、言い換えれば、神は事物の实在と活動の作用因である(E1P25)。スピノザにおいて、卓越した存在者がその他の事物を根拠づける存在 - 論と卓越した存在者が自己自身の根拠となる神 - 論は、別の因果性によって成立していることになる。もし別の因果性によって成立しているように見えるだけであれば、そもそも因果性を二つに区別すること事態の妥当性を問わなければならないだろう。同じ实在が帰結する以上、同じ因果性が存在 - 論と神 - 論になればならない。実際、キャローは『エチカ』第一部定義1に見いだされる自己原因の形相的因果性と定理16に見いだされる神のその他の事物に対する作用的因果性の結合を、一旦は困難として捉えるのだ³²、結局作用因が形相因と呼びうることを認めている³³。これによりキャローは『エチカ』第一部定義1と定理16ないし定理25に見いだされる因果性を統合し、困難を回避することができる。しかし神と事物において見いだされる实在は同じものではない。作用的因果性を形相的因果性に回収することで神と事物の实在についての因果性を同じものにしてしまえば、自己原因の必然的实在という特権性ないし卓越性に対する根拠づけが弱くなってしまう。形相因から帰結する必然的实在の特権性を認めることで、我々は神を卓越した存在者として定立することができる。スピノザの形而上学は汎神論と称されるが、やはり神はその他の存在者と比すれば卓越したものであり、様態が実体の変状である点で神とその他の存在者の間に差異はないが、その实在の特性を考える限りにおいては、実体と様態の差異、自己原因とその他の根拠づけられる存在者の差異、そして必然的实在を有する存在者と可能的实在を有する存在者との差異は存在しなければならない。キャローの作用因と形相因に関する解釈はこの差異を忘却することに他ならない。

おわりに

スピノザは形相的一義性を明示しており、そのためスピノザの形而上学に原因の存在 - 神 - 論的構成を適用することはそれほど困難ではない。しかし存在 - 論と神 - 論の構成が類似しているからといって、その内実まで同じものと考えてはならない。つまりそれぞれにおける因果性や实在を安易に同じものと見なすのは早計である。理論モデル「存在 - 神 - 論」はスピノザの形而上学において因果性が通底していることを分かりやすく提示する。その分かりやすさに安心するのではなく、我々はテキストに即して内実に迫らなければならない。スピノザの形而上学で言えば、必然的实在を導き出す形相的因果性と可能的实在を導き出す作用的因果性である。本稿では行ったのは必然的实在と可能的实在の違いから、それを導き出す因果性が異なるという推論にとどまる。この論拠はいまだ盤石とは言えず、形相的因果性と作用的因果性の適用範囲に関するさらなる考究が求められる。理論モデルの適用は、テキストとの矛盾に気を配るのであれば問題ないだろう。理論モデルの適用は理解の容易にしたり解釈の方向性を確定したりするため、有用性があると言える。しかしこれによって獲得された理解の容易さや解釈の方向性が、厳密な分析と理論構築を妨げる可能性もあるだろう。理論モデルの適用するだけにとどまらず、さらに思考を深めなければならない。

それではスピノザの形而上学においてはさらに注目すべきは何であろうか。スピノザの形而上学においてあらゆるものは神のうちに在る。このことを踏まえるならば、おそらく形相的因果性と作用的因果性はともに内在的因果性に包括されるだろう。この内在性こそスピノザの存在論のロゴスと言えよう。またスピノザの形而上学において思惟の存在 - 神 - 論的構成は見いだされなかったのだが、対象性の側面、すなわち知性のうちに在るという存在様態が欠落しているわけではない。むしろ「真なる観念はその対象と一致しなければならない」(EIAx6)ことから、思考と思考対象の存在との関係を問い直す必要性が提示される。スピノザは何をもって真なる観念としたのか、そしてスピノザの形而上学の構築に真なる観念はどのような役割を担っているのか。対象性と因果性、そして

存在論と認識論が収斂する場を見出すことこそ、スピノザの形而上学の構造を解明するために必要なことだろう。

註

- 1 『同一性と差異』は *Identität und Differenz*, Klett-Cotta, 1957/2008 を底本とし ID と略記する。この論文はヘーゲルの『大論理学 (Wissenschaft der Logik)』に関する 1956 年から 1957 年にかけての演習の内容を纏め、1957 年トートナウベルクで公演されたものである。
- 2 Courtine, Jean-François, *Inventio analogiae : Métaphysique et ontothéologie*, Vrin, 2005, pp.45-46
- 3 アカデミー版全集 (*Kant's gesammelte Schriften* / hrsg. von der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften, G. Reimer, 1913) から引用し、『純粹理性批判』の第一版を A、第二版を B と記し、頁数を記す。
- 4 Cf. A592-630/B620-685
- 5 Cf. A631-632/B659-660
- 6 ID, p. 45
- 7 *Ibid.*, p. 46
- 8 Cf. *ibid.*, p. 50
- 9 *Ibid.*, p.36
- 10 Cf. *ibid.*, p.51
- 11 Cf. *ibid.*
- 12 *Ibid.*, p.63
- 13 Cf. *ibid.*, pp.62-63.
- 14 退歩はまだ一步なされたのみであり、途上であると言える。しかしハイデガーは「形而上学の存在 - 神 - 論的構成」においてさらなる退歩について詳述せず、「言葉」という困難にぶつかることを述べることで演習 (公演) を終えている。
- 15 ここで現代に生きる我々はデカルト等における「対象的」という語彙についての特殊な用法に注意しなければならない。すなわち「観念を介して対象的に在る (esse objectum)」ことを「知性のうちに在る」こととして理解されなければならない。対象として在るということは、その事物が知性に対象化されるということに他ならない。
- 16 思惟の存在 - 神 - 論の内実から考えれば、理論的存在者は対象化された存在であり、このままでは現実中存在するという地位を与えることはできない。
- 17 マリオンは全ての實在を「存在する限りの全ての存在者 (tout étant en tant qu'il est)」と言い換える。思惟の存在 - 神 - 論においては超越的な存在者である我においてのみその實在は認められる。原因の存在 - 神 - 論を語ることでその他ものの實在にまでいたることができる。
- 18 この言葉でマリオンが念頭に置いているのはライプニッツの充足理由律である (Cf. Marion, Jean-Luc, *Sur le prisme métaphysique de Descartes*, PUF, 1986, p.115)。
- 19 Cf. *ibid.*, p. 315
- 20 Cf. *ibid.*, p. 317
- 21 原因を原理とした存在 - 論においては、原因されたものが他によってか自身によってかということは問題ではない。まさに「原因された」ということが問題なのであり、原因性そのものが問題なのだということになる。このことからマリオンは神が原因された存在であるということに関する問題を回避し、自己原因という資格を神に与える。
- 22 *Ibid.*, p. 130
- 23 Cf. *ibid.*, p.133
- 24 Cf. *ibid.*, p. 136
- 25 本稿ではマリオンによる形而上学への存在 - 神 - 論の適用を概略することにとどめる。存在 - 神 - 論の適用がデカルトの意図した形而上学を記述することの助けになっている確証はないからである。そこで『プリズム』においてマリオンが目指している哲学を簡単に纏めておく。マリオンは二つの存在 - 神 - 論の卓越した存在者である「我」と「自己原因」について、それぞれ『プリズム』の第三章、第四章で詳述し、デカルト形而上学の限界を示す。そこでマリオンは形而上学からの「超出 (dépassement)」を求めるが、プラトン主義から反転するニーチェ、存在論の歴史を破壊するハイデガー、意味の脱構築をするデリダを、「見えない暴力」を行っているとして批判する。マリオンが形而上学の超出として採用するのはパスカルであり、「愛 (charité)」による形而上学の解任を目指す (Cf. *ibid.*, pp.377-378)。
- 26 むしろ我々がデカルト形而上学、特に『省察』を通じて経験することは、存在するものの存在様態が発見されながら認識が進むことであり、いわば形而上学の存在 - 知識論的構成であるようにも思われる。
- 27 Cf. *ibid.*, p.135
- 28 スピノザのテキスト引用はゲブハルト版 (G) から行い、『エチカ』 = E、定義 = Def、公理 = Ax、定理 = P と略記する。

- 29 スピノザは『デカルトの哲学の原理』においてデカルトと同じ途を辿り、「我」に至る。しかし『デカルトの哲学の原理』をスピノザ哲学としてそのまま採用できるわけではないため、この著作については本稿では割愛する。
- 30 本稿 3-1 を参照。
- 31 スピノザ哲学に充足理由律がある確証はないが、キャローはスピノザにおける神も充足理由律に従うと解釈している（Cf. Carraud, Vincent, *Causa sive ratio*, PUF, 2003, p. 329）。
- 32 Cf. *ibid.*, p. 311
- 33 Cf. *ibid.*, p. 323